

大正二年一月五日發行

婦人と子ども

第十三卷
第一號

フレーベル會

次第壹卷參拾第

幼稚園教育界の二大急務

簡易幼稚園の普及

保姆養成機關の必要

色彩と美術

如何にして幼児に圖畫を描かしむべきか

一月に咲く花二つ三つ

二羽の雛

教へない教育

菅原教造著
藤五代策
保井コノ
杉井ふさ
倉橋惣三

新年に際し會員諸君の御健康を祈る

フレーベル會幹事

お正月早々御用の品々

がございましたなら、何なりご御注文下されたし。

三越へ御注文下さるには御手紙にて充分なり。

全國各地方よりの御注文引きも切らず、それが爲め特に充分なる設備を爲し、御用品を懇篤に撰擇して御届け申して居ります。一度御試しに御注文下され度、充分に御満足遊ばさる事ご信じます。

▼「地方御注文案内書」は御一報次第進呈致します▲

東京駿河町



三越呉服店

(振替貯金口座東京三〇〇番)

婦人と子ども

第十三卷第一號

幼稚園教育界の二大急務

簡易幼稚園の普及と保姆養成機關の必要

一、簡易幼稚園の普及

新らしき御代第二年の始に當つて、我が幼稚園教育界のことを思へば、忽ち念頭に浮び来る二大急務がある。簡易幼稚園の普及と、保姆養成機關の必要と、即ち此の二つである。

性質のものでないことは有識者の明かに唱道する處となつて居る。而して其の必要は一年々々と促されて居るのである。

時代の餘義なくする處、家庭は其の兒女の學齡前の教養を完ふする時間さへ減せられて居る。或は全く奪はれてさへ居るのが少くない。父は外に、母は内にとは幸福なる昔の子供のことであつた。今日に於ては、母も亦その愛兒を家に残して外に働かなければならぬものが多い。或はまた家の興起と共に、幼稚園も亦これと無關係に居るべ

守りに餘念なき身となることを許されず。悪いとは知りながら子供を一人で遊ばせて置かなければならぬことになる。餘融ある上流中流の家庭を別にして、社會多數の一般生活に於ては、斯くの如きは普通の事實である。

かゝる事情の最も甚だしいのは夫婦して工場へ通ふ工業地の家庭である。家内中が農作に忙しい農村の家庭である。また表面上それ程に著しくはないとしても、せち辛い市街生活に於ても殆んど同じことである。而して此のすべての場所に、簡易幼稚園の普及が必要が起るのである。必ずしも無料幼稚園の慈善的恩惠に頼ろうと願ふのではない。相當の保育料は勿論差出すから、一日なり半日なり親に代つて子供等を教養して下さる處があらばとは、之等の家庭の切なる希望なのである。即ち茲にいふ簡易幼稚園とは、彼の細民の家庭のために設けられたる特殊慈善家の事業をいふもの

ではない。その必要大切は勿論言をまたぬ處であるが、それ程特殊ならざる普通の幼兒教育場も、社會當然の必要である。

今日に於ては次第に其の弊を除かれつゝある様であるが、それでも尙ほ幼稚園は一種の贅澤なる教育機關の如く思はれて居ることがある。必要よりは贅澤のことの様に考へられて居ることがあるまた斯ういふ考へは實際その兒女を幼稚園に通はせて居る家庭の方にもある。我子の爲に何の有益な意味があるのかは考へずに、たゞ世間體の誇りから幼稚園へ通はせて居るといふ風なのも未だ折々ある。その流弊は幼稚園通ひに、「おんば日傘」の大業なみえなことが行はるゝようになる。更に此の要求に應する幼稚園の方では、徒に保育料を高くして、いよいよ其の贅澤機關たる特色を發揮する。かくて、教育普及を以て特色とする此の世紀に、幼稚園教育だけは富める家庭の獨占にな

ろうとする。しかも幼稚園教育はその社會的職

能から言つて、富める人手の足りた家庭よりも富
まざる人手不足の家庭に一層必要なるを思へば、
甚だ遺憾なる矛盾といふべきである。

かゝる流弊の一面ともいふべきか、今日に於て
は幼稚園は大都會だけのものゝ様な觀がある。勿
論心ある人々によつて町立に私立に、大都市以外
の幼稚園の設立されて居るものも無いではないが
それはまだ極く少數で例外の如く思はれて居る。
いふ迄もなく、大都會に幼稚園の必要なる大いなる
理由はある。益々その數を多くしなければなら
ぬのであるが、同じく家庭の手を助けるといふ目
的に於ては前述の通り、農村にも漁村にも小町村
にも設けらるゝ必要があるのである。殊にそれ等
の田園家庭に於ては大都會の家庭よりも家庭教育
の注意が細心綿密を缺き易い。學齢前の大切なる
一二年を棄てゝおくのは教育上から見ても非常な

不經濟である。

* * * * *

教育上のあらゆる方面から考察して、茲に設備
上理想的の大幼稚園を建て得ることは愉快なこと
に相違ない。そういふ理想的幼稚園もどしき出
來て貰はなければならぬ。しかし、前に述べて
来た如き理由のもとに、設備はそれ程完全といか
なくとも、兎に角適當な遊び相手もないとか、適
當な遊び場所もないとかいふ子供達の爲に、簡易
幼稚園の普及は、今日時代の大きいなる要求であ
る。而して此の簡易幼稚園を作り得る爲には、な
るべく少い経費で出来る幼稚園の研究が直接の問
題になる。狭い地面を最も都合よく用ひ、少ない
材料を巧に利用し、少い人數で上手に切り廻し得
る工夫が何より肝要になる。そして其の結果は幼
児の家庭の負擔すべき保育料が軽くなつて、一般
社會の普通家庭が、特別なる心配なく其兒女を通

* * * * *

社会的職能から言つて、富める人手の足りた家庭よりも富
まざる人手不足の家庭に一層必要なるを思へば、
甚だ遺憾なる矛盾といふべきである。

かゝる流弊の一面ともいふべきか、今日に於て
は幼稚園は大都會だけのものゝ様な觀がある。勿
論心ある人々によつて町立に私立に、大都市以外
の幼稚園の設立されて居るものも無いではないが
それはまだ極く少數で例外の如く思はれて居る。
いふ迄もなく、大都會に幼稚園の必要なる大いなる
理由はある。益々その數を多くしなければなら
ぬのであるが、同じく家庭の手を助けるといふ目
的に於ては前述の通り、農村にも漁村にも小町村
にも設けらるゝ必要があるのである。殊にそれ等
の田園家庭に於ては大都會の家庭よりも家庭教育
の注意が細心綿密を缺き易い。學齢前の大切なる
一二年を棄てゝおくのは教育上から見ても非常な

園させ得るようになるのである。また農村でも漁村でも、比載的容易に幼稚園を設け得るようになるのである。而して、全國のすべての學齡前幼児が幼稚園教育を受くるといふ理想の時は一步々々近づくのである。

素より粗製濫造は最も忌むべきことであるが、幸福を出来るだけ大勢の子供に頗ち度いのが簡易幼稚園の希望である。

保育上の問題はいろいろある。しかし何が何であつても、究極する處は「人」の問題である。主義や議論や乃至設備で教育が出来るものではない。詰る處は保母その人にあることである。假令ば保育上の自由主義とか、自由遊戯とか言つても、それはよき保母あつての後のことである。幼稚園教育の成功が一つに良保母によることは多言を要し

ない。然るに茲に實際上の一奇觀は、幼稚園保母養成機關の甚だ不充分なことである。而してそれが敢て不思議とも思はれて居ないことである。

勿論、保母養成機關の不充分なることに就ては種々實際上の理由もある。経費上、そこ迄手が届かないといへばそれ迄のことである。しかし、密に考察して見ると、保母養成の爲の特別なる機關がそれ程必要と感せられないのには、一つの意外な誤謬が基になつて居るようである。他なし、幼稚園教育は誰れにでも出来る。特別なる素養も修業もいらぬといふ見解である。

しかし其の誤解たることは今更多く言ふを要しない。すべて無智は事を容易すく見るものであるが、幼稚園といふ學齡前の教育が、如何なる特別なる智識と技能とを要するかといふことは、苟も幼稚園の何たるかを知る人には、最も明瞭なこと

なのである。然らば即ち夫々の教育に特別なる教養成機關の必要なる如く、幼稚園教育者にも、其の特別なる養成機關が必要である。

然るに今日はその機關が一向完備して居ない爲に、此の重要な専門家の供給が甚だ乏しいのである。新らしく幼稚園を設くる人は、その保母を得るに困難して居る。自ら幼稚園教育者たらんとする人も、適當なる教習所のないのに困つて居る。勿論今日と雖も多くの幼稚園では特殊なる少數者が爲に保育練習の便宜を與へて居る處は少くないしかし、それは實習に便を得るだけで、組織的に幼稚園の學問をするといふ迄に整つたものではない。或は熟練家は出来るかも知らぬが、基礎的知識に於ては容易に得られない。丁度年期奉公によつて商賣の道を覺えるようなものである。それはそれとして、商業學校の必要は確にある。組織的知識に基いしないから保育が常に傳製的になる。

新らしい開拓とか進歩とかいふことが頓とない。現在に間にあつてゆけばいゝ位のことでは、幼稚園教育の將來が甚だ以て心もとないものである。保母養成機關の内容に就ては、吾人密に理想案を有して居る。しかし何事も理想は容易に實現せられない。餘り多きを望んで成らざるよりは、成程に於て成らせなければならないと思ふ。即ち女子師範學校若くは高等女學校卒業程度の普通知識を有するもの、少くも一年の講義と實習とを與へるのである。慾と言へば限りもないが、先づ之れで幼稚園教育の本質と方法とに關する基礎的知識を明瞭ならしめ、自ら意味ある練習をなし得る丈けの準備が出来るかと思ふのである。それから上は自分の工夫と熟練とに待つてよい。一年と言へば短い様であるが、もう諸々に研究慾があるのであるから可なり充實した教育を與へることが出来る。高等女學校なり女子師範學校なりを卒業

後、其の上に二年も三年もといふことになつては今日の状態には餘り理想に馳せ過ぎる觀があるしまた、教育の方法その宜しきを得れば、そう多くの年限を要しない。たゞ其の素地が茲に要求した以下では到底不充分である。

色 彩 と 美 術

文 學 士 菅 原 教 造

凡そ人の心の中で感覚的の要素と形式的（或は靈的）の要素とは離はなれいきで、その關係は人によつて違ひましてどんな人でも一樣に申することは出来ません。つまり人によつて感覚的の要素により多く支配される人もあるれば形式的の要素に甚だしく影響される人もあるのであります。こゝが理論家や美術家の議論の分れる處で、甲が感覚的印象を申しますと乙は之に對し

兎に角、幼稚園教育を外的に盛ならしむるにも内的に充實した効果あらしむるにも、今日何より第一の急務は此の保育養成にある。如何なる形式に於ても是非その實現を切望に絶えないものである。

て我々の心の他の方面にもつと強く訴へる要素の狀態を説くといふ始未であります。斯くの如くにして此の兩派の確執は長い間結ばれて未だに解けやうともしないのであります。尤も今は昔に比べて左程に烈しくはありません。藝術的の反應を分けますと作品の形式及び意味を主とするものと内容にはかまはず只見たり聞いたりして眼や耳を喜ばせばよいとするもの、二様になります。印象派

の如きは後者の適例で、畫題が何であらうとも、繪の意味がどうであらうとも、こんな事には少しも頓着せず、只華やかな色を以て總てを解決しやうと勉めるものであります。印象派は斯様な主義でありますから。其の極端論者になりますと、往々にして、智的秩序などは全く度外視して、殆んど狂的に直接の印象に許り、熱中して居ります。

さて是から素畫の彩畫即ち色を用ゐない線畫きの畫と、色を用ひた繪との對立について、心理的の研究を御紹介したいと思ひます。心理的に申しますと、色の感覺は形の知覺より後れて發達したものであることは確な證據があります。未だ視覺の出来なかつたすと前から、空間の布置即ち場所の關係を知覺する爲めに、我々には筋肉と皮膚との感覺がありました。そして視覺が出来るやうになつてから無色の感覺は非常に不完全で且つ不安で形に對する知覺と比べてはその根底の薄いことは

同日の論ではなかつたのであります。或る人は生れたての赤兒は總て色盲であるといふて居りますが、これはどうかと思ひます。然し如何なる人も視野の全部が色彩に反應するものでないといふのは事實であります。即ち色を色として見るのは視野の中心部に過ぎないので、この中心を過ぎかつては、唯非常に強度の色をやつと認め得る許りで、更にもつと遠ざかつて周圍部に行けば、全然色覺を失ふのであります。試みに色紙の小さく切つたものを視野の周邊に持つて來ると、其の色紙の形だけは判然と分りますが、色はどうかと云ふに、どんな色でも鼠に見えます。若し其本來の色を見様とすれば、ならば其の色紙をもつと視野の中心に近づければなりません。是に於て視覺は形には全部反應しますが、色に對しては其の一部份より反應しないことが分ります。彼の全色盲患者などは、視野の中

も拘はらず、物の形は間接視野即ち視野の周圍部でもはつきりと分るといふのは、つまり我々の色覺は不安定なもので、稍ともすれば欠陥を生じて未だ色覺といふもの、出來なかつた時代の人したやうな味氣ない経験を、再び我々に嘗めさせる事を示すものであります。

色盲の人の色の見えないのは當然のことでありますが、さうでない普通の人の中でも甲と乙とでは銘々の生理上の素質の相違から同じ赤なら赤といふ色に對する感じが違ふと説く人があります。此の説の實否はさて措き、各人の物の色に於ける興味に著しい相違のあることは形の場合と比較して見て明かであります。これは果して我々の眼にある相違に歸すべきか否かは判然しませんけれども、それは兎に角、形に對する興味は色に於けるものより遙に根底の深いものであるらしく思はれます。元來形に對する興味は之を一種の贅澤とい

ふよりは、人生に缺くべからざる要素の一と稱すべきであります。と申しますのは我々が日常遭遇するあらゆる事物を、或は敵と識り又は味方と認めますのは、實に其の物の形に現れた特徴によるであります。色彩は此の場合に之れ程重大視されません。早い例が景色にしろ人の肖像にしろ、あの寫眞は光度の明暗を加減する外、何等の色を現はしてゐないにも拘らず、その興へる印象の深大なことは、とても巧に著色された海圖などの遠く及ぶ所であります。この事實から云へば形を度外視しての色は少しも意味をなさぬものである事がよく分ります。要するに色彩は我々にとつて無くてならぬものではないであります。多くの人はどちらかと申せば形に多く興味を感じるやうであります。然し人によつては此の比較的不必要の色彩の方に却つて多く興味を感する人もあります。又人によつては色にしろ形にしろ之に對し

て常人のとても思ひ及ばぬ様な強い興味を起す人もあるのであります。此の現象は近年に至つて注目されるやうになつたもので此の種の人になると無形のものに形をつけ無色のものに色のある様に思ふのであります。後者の例として音階の中で高音は黄色に見え、低音は紫に見えるといふ人が實際あります。斯ういふ人は亦聞く言葉毎に色が着いて聞えるのであります。又言葉のみならず其の言葉を組み立てゝある音にも一々異つた色を認めます。例へば英語の「サイズ」といふ言語を聞くと初の「サイ」は橙がかつた黄色に見え、終の「ズ」ははつきりと赤く見えるといふのであります。こんな人には色の感じが何物よりも非常に超越して居ります。今一つの珍らしい型といふのは總てのものが形ある様に見えるといふのであります。即ち心に浮ぶありとあらゆる觀念が、皆一定の形を

もつて現れてくるといふのであります。例へば水曜といふ觀念は窓掛の垂れた窓を思はせ、月曜は中央に點のある三角形となつて現れて來ます。以上のやうなのは極く珍らしい例として、一月、二月といふやうな月名や A B C や 1. 2. 3. 4. などがごたくとしてはゐますが、とにかく一定の形をとつていつも現れてくるといふ人は澤山あります。以上のやうな心の奇妙な働き、我々にどれだけの役をしてくれるかは少時措いて、それよりは以上述べたやうな型の分類をしてみると二つになります。一は形に興味を持つ人でこれは數多く進化の上からいつても先に發達したものであります。一は色に對して興味を持つ人でこれは數の點からいふても少く且つ珍らしいものであります。その差異をよく心得ておきますと美術家といふものは、其専門人々によつて各々獨特の技量を有するものであると云ふ事を認めることが出来ます。

又素人がいろいろな繪の流派をみて、あれがよいとかこれがよいとか評する譯も分るのであります。此の二つの型の相違は、やがて畫家が素畫にゆくか彩畫に入るかと定めるものであります、或は色彩にのみ主力を注ぐ畫家があつたり、或は好んで光度の明暗を對比したり又は圖を引いたりする畫家の出るといふのは偶然のことではないのであります。古來有名な藝術家の中でルーベンスやヴェニス派の畫家は前者に屬するもので、レンブラントやミケランジエロの如きは後者の代表的人物であります。

然し若し前にいふたやうな色と形との間の對立許りが初に述べた藝術の感覺的方面と關係的又は形式的方面との間の爭論の要點であるなどこの論據は淺薄の誹を免れません。然し感覺と理解の力(智惠)との間の對立又は敵對の歴史的教義はこれよりもっと深い根ざしを持つてゐます。一體限

りある心にさう何もかも一時につめることは出来ません。そこで心は經濟法に従つて若し感覺的の要素が優勢となるには心の他の要素が勢ひ壓倒されて收縮せねばならぬことを知つたのであります。例へば感覺の印象があまりに明瞭であると印象の意味を解することが出来なくなります。又之と反対に物の相互の關係をよく知らうとしますには勢ひ物體個々に働く感覺の方をおろそかにせねばなりません。即ちこの場合の感覺からの印象はぼんやりしたものになります。要するに一物を得る爲めには他を犠牲に供さねばならぬといふことになります。斯くの如くにして若し我々が一物に於て色の方を充分認めたいと思ひましたら成るだけ注意して色以外にはその物の意味又は内容を度外視する事が必要であります。例へば書齋から白い窓掛を通して外の景色を眺めますと全體の朦朧とした景色が非常に紫の調子を帶びて居るものであり

ます。この現象は木は木蔭は蔭として別々に見たのでは起る者ではありません。といふのはさうなりますとつまり物體が個々に強く感覺に印象を與へますため物體相互の巧妙な關係を昧ふことが出来なくなるからであります。此の現象は聽覺には一層明瞭でなります。例へば演説を聞く時など講演者のあまりに近くにゐると其の一言／＼がガシ／＼と強く聞えて反つて全體の意味を捕捉することが出来ず又之による聯想も起つて來ないのであります。オーケストラを聞く場合もその通りで相當の距離を保つて聞くないと唯々個々の音が聞える許りで肝心の調和した音を聞くことは出来ません。我々が森といひ林といふのも亦この如く木詩らしい詩になりますと或る程度迄感覺的の要素を阻止して居るといふのはやはり此の法則によるものと思はれます。脚韻とか頭韻とかいふもの

は音律に於る如く心の高等な効を妨げます。小供の詩は其の著明な例であります。勿論例外はありますけれども概してひますと様式が眞面目に又精神になればなる程其の中に含む感覺的の分子の減つてくるのが一般であります。然し一方にはシェークスピアが老境に入つてからは蹊韻した對句を使はなかつたといふ著明な事實があります。約百記や詩篇の詩には其の特色とする處は韻でもなく音格でもなくて寧ろ感覺では感知し得ない莊重な形式になります。即ち莊重な語勢で表はされた思想の對偶又は重複であります。若し他の音律があるとしてもそれはあまりに不明瞭で其の存在さへ問題なのであります。

けれどかういふたからとて精練した藝術が必ずしも超感覺的のものであるとは斷言出来ません。最も傾向は藝術が乾燥無味に流れるのではなくて反つて分離してゆく傾があります。即ち藝術は

特殊的のものに分れて美をあらゆる方面から疎漏なく認めやうとするのであります。其の特殊的藝術といふ中には感覺から来るはつきりとした瞬間に印象は只有的といふ許りで其の印象の起す表象に關聯した快樂が主となるといふのと、之と反対に全體の連絡を保つ心の働くは第二で感覺から来る瞬間の快樂に重きを置くといふの、二種があります。以上二種の藝術の手近の例は音樂と詩とであります。もと野蠻時代にあつては音樂は一の獨立した藝術ではなくて只舞踏の興を添へるものとしてか又は詩に節つけて吟じたに過ぎなかつたのであります。つまり音樂は昔は他の藝術の從僕といふ格であつたのであります。けれど人類が追々發達するにつれて色々の藝術の個々の價値を認めるやうになりました。従つて音樂を今迄の如く輕視することなく之を一の獨立した藝術として取り扱ふやうになつたのであります。即ち色々と經驗し

た結果詩なら詩の内容さへよく調つて居れば聽衆の心得ることはそれだけで充分であつて何も事更にそれに節付けて歌ふ必要はないことを見出しました。又音樂にした處で之を詩と一緒に詩の方に半分以上氣を奪はれながら聽くより、音樂なら音樂だけを聞いた方が骨も折れず且つもつと面白く聽けるといふことをも悟つたのであります。今假にハムレットをオペラに使つたとしたらどうであります。一體このオペラといふのは音樂と劇とを一緒にしたやうなもので隨つて其の見物人に與へる印象も劇とも音樂ともつかぬ中間の弱いものであります。以上のやうな理由のもとに音樂は舞踏及び詩から全く獨立して自由に發展するやうになりました。今の處、人の耳を樂ませる唯一の藝術は音樂で詩をかういふ目的に使ふことは全く廢れてしまつたのであります。つまり音樂は前に擧げた二種の藝術の中の感覺を主とする

方で詩は内容を主とする方なのであります。隨つて感覺的の音樂に感覺の經驗を無視するやうな音樂をもつて來たからとて勿論歓迎されないのであります。

眼の方の藝術には詩と音樂といふやうな明な分離は行はれてゐません。又これから以後も果して起るか否かは疑問であります。けれども其の兆の萬更無いでもあります。例へば彫刻と繪畫とは分れてよいと思ひます。一體希臘人は建物や彫像を好んで著色したものであります。けれど我々は寧ろ色の著かないものを好んで色の著いたものは低趣味のものとして排斥します。斯くの如く白黒の外色を用ひないものを好むといふことは色が無くともそれに代るものを見へることを明に證明してゐるのであります。斯くの如き色を用ひない藝術に對立すべきものは音の音樂に於るが如く色といふ處の現し方などは實に大膽でとても木の戸を敲く音とは受取れないであります。若し似て居

モザイックや壁畫や織物によくある圖案模様などは稍々此の種の藝術に屬すべきものであります。けれど是等の繪や模様は色と線とが集つて出來て居るのもとより色だけの藝術ではあります。通常の繪畫になると猶更色だけではてんて繪にならないであります。凡そ繪を描くには其の實物の色と共に形をも模寫するのが規定であります。若し繪工の色が極端で不自然であるなら其の言ひ譯として少くとも畫工自身には其の實物がさういふ色に見えると言ひ張るのが普通であります。此の點に於ては音樂家は全く自由でどんな音樂を作曲しやうと其の音樂が作曲家自身の現はさうと覗つて居る音に仿彿たるものであらうとあるまいとそんなことはかまはぬのであります。ベートーフエンの曲の中で彼の有名な運命の神が戸を敲くといふ處の現し方などは實に大膽でとても木の戸を敲く音とは受取れないであります。若し似て居

るとすれば絃の抽象的の音律と勢とが所謂コツコツといふ音かと思はれる位であります。斯くの如く音樂の方で自由であるに反し色彩の方に此の自由のないといふのは色自身の性質によるものとは思はれません。色彩が華やかさと人を動かす情緒に富んで居ることは音樂に劣らぬのであります。又若し其の強度と調子とを規則正しく變へて反覆してゆくと色でも音樂のやうに音律の感を與へることも出来ます。是に於て音が色に比べて殊に優つた點はないといふことになります。音樂が藝術の中で早くから獨立した一の藝術となつたといふのは其の機械的に自由に音を出したり又之を速に變化してゆくことの出来る故であります。若し機械的にもつと單純に出來ることなら自然が我々に與へるにも我々の持つて居るやうな聲でなく速にかつ任意に色を出すことの出来る器官を以てしたであります。もしこんな器官があつ

たとしたらそれが生存競争場裡になつて非常に都合のよいことは申す迄もありません。又若し人が火の色や強さも恰も琴の糸を彈いたり聲の調子や音量を變へるやうに任意に且つ容易に變へることが出来るとしたら光も亦音のやうに自由に使へるものとなるのであります。斯く色を自由自在に使ふことは出來得べからざることの様に思はれますが又一方からいふと出來さうにも思はれるのであります。勿論今が今といふ譯ではありませんが或る遠い未來でも我々の重寶して居る電氣などはかうして起したものかと歴史の記録を繰つていふ様な時が來れば純粹な色が調子よく結合して其の光度や色が音律的に始と中と終といふ風に漸を逐ふて變化してゆくといふやうな美學上の新言語も出来るやうになだらうと思ひます。色だけでは繪を畫くことの出來ないことは前に申した通りでありますか色だけの表情が亦崇高な感を與へ得るこ

とは彼の華やかな日没の光景がどんな感情を人に起させるかを考へてみれば解るのであります。藝術は無窮であります。随つて其の心理も亦未だ研究の余地が充分あります。我々が模倣の中に見出す樂や自分自身を表出することの樂、又我々の性質を言ひ表す絶體的必要や藝術、戯曲が氣を爽にする理由等皆研究の好材料であります。こゝに私の述べましたのは藝術的衝動の緒を究めたに過ぎぬからこれによつて直に哲學的真理の何物

なるかを覗ひ知らうとは無理な注文であります。此の研究は要するに藝術に於る完成した博物館とでもいふやうなもので之によつて美の色々の形を認め併せて如何に其個々の美が總體美に、影響するかを知ることが出来るのであります。及若し此の研究によつて個人的好の起る理由及び藝術の歴史的發達と分離との理由をも説明することが出来れば此の研究は少くとも或る纏つた研究の端緒となすものといつてよいでありませう（ストラットンより）。

如何にして幼兒に圖畫を描かしもべきか

東京女子高等師範學校助教授

藤 五代 策

幼兒に鉛筆や筆の如きものを與ふると、何よりの大喜びで、そこらあたりの壁でも障子でも遠慮なしに何か自分の思ふまゝの形を描くものである

此の自發心を啓發して善良に導かば教育上多大の効果を收め得らるゝものであらふ、さるにも係らず世の父兄は鉛筆や筆を幼兒の大禁物として沒收

するものあるは誠に遺憾千萬である。ハイム氏は云へらく「児童は思想に富み感情に餘りあるより技術的の正確なる方法に拘はらず己が想像を寫すことある可し教師の干涉すべきは此の點にあるなりと」又曰く「世の父兄は愛兒の口腹の慾を充たしむるを知りて天賦の圖畫の慾望を満足せしめ之を利導することを知らず」と歐米の教育家は皆異口同音に幼兒に圖畫を學習せしむることの最も有益なることを説かれて居るのである、併し手指未だ軟弱にしてしかも経験の甚だ乏しき幼兒等に向つて實際に畫を描かせやうとするは甚だ困難なる仕事である、彼の小學校の児童の様に嚴重に臨畫せしむるとか寫生せしむるとか又考案畫せしむる如きことは望まれないから、まだぐく是等の方法よりもすつと手易い方法によつて描出せしむべきことゝ思はる、左に之れが描寫法の四五を掲ぐることにせう。

一、平面形の折紙細工品又は草木の葉を寫さしむること。

兜、福助、蟬などの如く、平面形に折られたる折紙細工品は、畫用紙面に密着せしめて其の輪廓を描かるゝから、幼兒は殆んど器械的に其の形を描かるゝので頗る興味を有するものである。

又草木の葉は、この折紙品に比して種々の變化に富み、且秋末のものは實じて觀賞描くべからざる美色を呈し居れば、幼兒は喜んで其の形を描かうとするものである、ハイレー氏曰く「實物を手本として畫を學ばしむるは圖畫教育上最も有効なるものなり而して其の手本と爲すべき實物は之を植物に求むるを最良とす植物は何れの場所に於ても之を得るに難からず且つ其形狀の簡単にして變化に富めるは他物の及ばざる所なり又小兒は概して草木を愛す故に好みて其寫生を敢てすべし」と併し植物の花は平面のもの少なく幼兒の寫生に

は頗る困難なれども。葉は數種のものを除く外は殆ど皆平面形であるから、幼兒の寫生には最適當のものである。若し甚だしく曲れる葉などは、新聞紙等に挿み一夜間重しをかくれば平面になるから、之を畫用紙に載せて輪廓を寫さばよく描かるのである。

鉛筆にて自然の色を塗さすのである。

二、盛に影畫を描かしむること。

影畫のことは「シルエット」の描法と稱へて、近時圖畫教授上盛に應用されてゐる、之れは物體と空間との境界を明瞭に見はすために圖形の輪廓内を全く黒く塗り潰した描き方である、或は又之れと反対に空間を全く黒く塗て物體のみを眞白く残すこともある、さて此の影畫は如何にして作るかと云ふに、物體の一方に強き光線を受けしめ反対の方を全く暗くなして、紙か板の如きものをして、その影を受けしむれば該物の形狀が寫さる、

のである、電氣燈や瓦斯燈の真下に於て電車、船、犬、猫の如き小形の玩具類を此の方法によりて寫さしめんは幼兒の最も好む處である。

三、針金にて大體の輪廓を作り之れを寫さしむること。

前二種の方法は實物の輪廓をそのまま寫すと云ふことであつたが、こゝに云ふ針金輪廓法は思ふまゝの圖形を作り與へて之を描かせ得る簡便法である、其の法は先づ銅の針金の二十番位のものを二尺位の長さに切り、之れを藁火にて焼くときは極めて柔かになりて自由に曲ぐることが出来るから、保姆又は父兄の方々は犬、猫、兔などの大體の輪廓を作りて幼兒に與へるのである。幼兒はその輪廓型を畫紙の上に載せて鉛筆にて輪廓を辿り寫すのである、勿論此の輪廓型は細部分をまで作ることは出來ぬから、それ等の細き部分は幼兒が後で描き加へるのである、針金は何度でも使へるが

若し硬くなつたら、再び藁火で熱するのである、
時にはこの針金にて幼児自身に林檎、瓢箪、慈姑など
の形を曲げさせることも手工として又圖畫として
極めて面白い方法であらう。

四、畫用紙に必要な形狀を描き興へ其の他の部
分を幼児に描かしむること。

例へば兎と龜の駆けくらべの畫を描かしめんには、先づ兎の頭、脚等を描き又龜の首と脚位を極めて簡易に淡い青色の鉛筆にて描き興へ、幼児には餘他の部分を描き足させて好みの畫を作らすのである。若し鷹寫版又は印刷等にて此の原圖が刷らるゝならば餘程保母の手數が省かるゝことである。
五、透寫畫を描かすべきこと。

透寫畫とは模範畫即ち手本を透視して描かす方
法である、而して此の透視法には薄用紙を用ふる場合と、硝子板を用ふる場合との二方法がある、

普通の判紙は極めて薄いから、よく手本を透寫して描くことが出来る、併し判紙には鉛筆では描か無い上に鉛筆の色がよく見えない、畫用紙の方は厚いから手本をよく寫さうと、するには硝子戸の上に手本と畫用紙とを重ねて透寫すればよく描かれるゝのである、或は畫用紙を下に手本を上になして火箸の先端の如きものにて手本を押へて寫すことも出来るのである、次に硝子板に透寫する方法は玩具として販賣してゐるが、其の構造は長七寸幅五寸位の黝色擦り硝子の下に手本を布き、色石筆もて其の上より透寫するのである。

斯く方法を研究すれば尙幾種類もあるであらう要するに幼児の圖畫は保母の方より六七分までは站立をなし興へて、三四分の部分に向つて描かす様にしたならば頗る佳良の成績が見らるゝであらう、いくら幼児だからとて、從來の如く全く放任して描かせては、いつまで立つても上手にはなれ

ない、勿論幼稚園の保育法は小學校の教授訓練の如く、八釜敷申すべき程でもあるまいけれども、圖畫なども今少し深く研究したならば、種々の妙

案も案出せらるゝことであらふと余は大に希望を有してゐる次第である。

一月に咲く花一一三つ

東京女子高等師範學校助教授 保井ノ

ふくじゅさう又、元日草は漢名を側金盞花と申します、植物學上からは、毛茛科に屬する多年生草木であります、休眠して居た地下莖から地上莖を抽出する時地上莖は大きな鱗片葉を以て居りまして是が若い葉や苔を包んで居る爲に筍の様な様子を致します、此鱗片葉は全く若い葉や苔を保護する爲のもので、櫻や桃の芽が冬籠りをする間に是を保護するのもやはり鱗片葉であります、さて此特別の葉の中から最初に抽出るのは花であります、花は五個の萼がありますそして其中に十枚以

上の瓣からなる花冠があります、花冠の色は普通は黃色で、ふくじゅさうといへば普通黃色の花との考が一番に出て来さうでありますが白色、紅色、淡黃と様々の色のがあり瓣の形も細いのや廣いのや様々あります、雄蕊は多數、雌蕊も多數あります。

最初に頂きの花が咲いて次々に其下の枝の花が咲きました葉を出します、葉は複羽状をして居ります、可憐であります、普通は花を賞しますが、葉の出た後も注意しますと其後の枝にも花をつけま

すが一月から引ついて花期を相應に長く保たせられます。

東京に供給するふくじゅさうは、諸所から野生のものをとつて来るものもありますが重には信州のと東京近在の青梅、秩父、北海道とで栽培せらるゝものとあります一芽一錢五厘二錢位から一圓二圓といふ高價のものもあります培栽上の變り者も相當に澤山ありまして菊や朝顔の様に古雅な名もつけられてあります、尙北海道産にはいちげふくじゅさう(一華福壽草)といつて一莖一花の種類もあります。

此頃縁日などで澤山に賣つて居りますゆきわりさう、是は高山で所謂萬年の雪のとけかけた間に可憐の花が見えるといふ意味から雪割草の名を得たものであります、みすみさうの本名があります、是はやはり毛茛科の植物で、ふくじゅさうときは近縁故のものであります、此頃お求めになり

ますと舊い葉が附いて居りますが花姑では舊葉を落して賣り出します、是は冬籠りの用意をして居るのを山から取り出して來るので本來は雪解けの時に咲くのを里に下して早く暖かな氣候の下で咲かせるので自然の状態では今頃咲くのではあります。それはふくじゅさうでもさうなので北海道に自生のものなどは今頃は開花など、いふ騒ぎではないのであります。

みすみさうもやはり根もとには何枚かの鱗片葉があります是は其表面に澤山の毛を持つて居ります、此鱗片葉の間から五六本の花梗を出して其の頂間に各一花をつけます、花梗にも毛を持つて居ます、花冠は六七枚の花瓣からなつて居りまして萼にも毛が澤山にあります、花弁は三枚あります、雄蕊は多數あります外國の栽培種では是が花瓣様になつて所謂千重のものがありますが我

國では野生のものばかりで、まだ栽培上の變種を出しますが、盛んに栽培せられませぬ。葉は山茶の葉の様に厚くて三尖形をして居ります。其角の尖りの鋭なものをみすみさうといつて、鈍なのをすはまさうと申ますが、是は左様の區別は出來ないさうであります。申後れましたが雌薬はふくじゆさうと同じ多數あります。

みすみさうに近いもので東京近傍などに多いおきなぐさといふのがあります。毛茸の澤山なものであります。が葉の形もよく花は暗紫色の目立たないけれども雅味のあるもので鉢にとるとなからく面白いと思ひます。西洋の野生のアネモネによく似たもので此みすみ草、其他に早春にさく一輪草、二輪草など、共にアネモネ属に入るべきものであります。

舶來のアネモネ是には園藝變種が澤山にあつて白紫赤など、「フレーム」に仕立て、美しい花を早

春に裝飾とするのも面白いと思ひます。割合に容易に栽培せられて南受けの所で霜除けをしてやれば一月中旬頃には既に花を見せます。

お正月の花には水仙を落してはなりますまい。水仙は前に申した花と違つて葉は併行の脈をもつて居ります。地下には大きい球があります。此球は地下水仙の袴といふのは鱗片葉と等しいもので低出葉と申ます。此間から普通の綠色の葉を出し其間から花梗を引き出します。此花梗は總花梗と申して其上方に五六の花をつけます。此各の花の梗を小花梗といひ是等の花を包む葉を苞と申まして通常葉と異ります。此花は三の數からなつて居て最外の三枚の萼と其中の三枚の花瓣とは同じ様な形と色とを爲て居ます。からは等を總べて花蓋と申します、花蓋について居る黃色の盃状のものは副冠と申まして或學者は花蓋の附屬物とせられます。又雄

薬の柄部の變化したものと申します、或稚類では是が非常に發達して大きくなります、喇叭水仙などは此例でありますこの中に六本の雄薬があります雌薬は一個でありますが子房がやはり三室になつて居ります、そして此子房は花蓋の筒部と結合して下生子房をして居ります、此點が百合の類と違ふ所で此植物は、石蒜科に屬するのであります。

東京へは房州から水仙が参ります九州の島原地方では水仙が澤山で耕作の害になる程だと申しますが如何ですか、併し國産のものは皆球が小さくて

一球から多數の花梗を出すと申す程で御座いませぬ此點に於ては所謂支那水仙を以て最良としなければなりませぬ、支那水仙と申ても支那一圓に出来るのでなく南部漳州地方に限られるので茲から北清を初め我國に迄輸入せらるゝ量は少々のもので御座いませんさうであります。水盤の中に育てられた大きい球から長きに過ぎぬ葉を抽出した中から大きい花の總が澤山に出て芳香を放つ點はとても在來種の及ばぬ所であつてお正月の飾りとしての一方の雄であると思はれます。

二 羽 の 雉

杉 井 ふ さ

子供の性として善いこと悪いこと總べて大人のすることを眞似るのは皆様の御存知通りであります。周圍の大人が動物を飼つて之を可愛がりま

すとそれを眼前に見る子供が何で無頓著でをられませう。初めの中は或は氣味悪がるかもしませんが漸く慣れて其の動物を知れば知る程それに對

する愛情は濃かになつて参ります。斯様にして日夜親む中、知らぬ間に其の動物に關する知識を得ますので、これがやがて動物學又は比較心理學に對する興味となり研究心となるものであります。動物を飼つておくといふだけで既に益することは前に申した如くであります。それを更に多少動物學又は心理學の心得ある父兄が自身學術的に其の動物を觀察するか又は子供に觀察することを教へたなら子供の上に益することも亦愈々大きいのであります。

觀察研究など、申しますと大變難かしいことでありますかの如く聞えますが實際は極く容易なもので且つ非常に興味の深いものであることは次に御紹介し様とするハント氏の雛に關する觀察の報告を御覽になれば明であろうと思ひます、氏の觀察は敢て新奇とは申しませんが觀察の方法が如何にも手輕であり、且つ興味湧が様に覺えますので、

若しこれを御紹介した爲めに皆様の中へ、それ程容易くて面白いものなら自分も一つしてみやうといふやうな心を御起しになる方が出來たなら廻らぬ筆をも省みず御紹介申した私も幸ひです、又恐らくはハント氏自身も本望であらうと思ひます。扱て氏が觀察を初めましたのは日本なら櫻もろろ／＼咲かうといふ三月三十日のことでそれに使つた雛といひますのは其の前日孵つた許りの白黒の二羽であります。

先づ最初の一日前に雛にとつては生れてから一日目の正午氏は試みに水で捏ねた碾割をやつてみましたが、二羽共食べませんでした。次にゼスクットの粉を入れてやりましたがそれと氣付かない様子なのでそつと箱の下敷になつてゐる紙の上に落してやつたら初めてたべました。それから互に嘴や眼の啄き合をはじめました。姫卵は二羽共大喜でたべます。氏が手を雛の上に蔽せると白の方

はグイ／＼と手を押し上げて飛出さうとします。

匙に水を入れて二羽の鼻先にもつてつてみました。黒は吃驚して飛び退きそのままビー／＼と鳴きました。けれども白の方は驚きません。食物の奪ひ合ひを初めました。白の方は黒より丈夫で随つて食べるよりも盛に食べます。又他の點に於ても白の方が進んでゐてパン屑を拾ふ時にも立派にピヨ／＼と啼けます。午後餌を食べながら黒は突然何物のか驚いて啼き出しましたが氏が聲を掛けたら安心したのでせう其の儘啼き止んでしまひました

この上に毛布を掛けてやりました。黒は一度左脚を擧げて爪先を閉ぢました、立てて居るといつてもヒヨロ／＼としてゐて氏が手を出すと其の働くまゝについて來ました。

第三日。昨日の経験から今日は最初に二羽の好きな筋卵をやりました。それを食べて居る間に氏が咳をせいたら二羽共吃驚仰天して床にひれ伏した儘數秒間は身動きもしませんでした。もうお互に眼の啄き合はしませんけれど其の代り食物の奪ひ合を盛に初めました。二羽共餌をやると今は何處においてもそれが食物であることを直に知る様になりました。面白いことには二羽共卵の白味の方が好きであります。白も黒もよく雛鳥のするやうに餌を食べながら嘴をぶる／＼と振ひます。すると食いかいた碎片が恰も翅あつて飛ぶ小虫のやうに四方に飛び散つてゆきます。それが雛にとつては餘程面白いと見えて其の碎片の跡を逐ふて一尺飲まずに出してしまひます。腹が一杯になると二羽共立つた儘で寝入つてしまひました。氏は二羽は

位走ります。午後空腹の頃を見計つて赤く染めたビスケットの規那鹽に漬けたのをやりました。白は三度黒は二度啄みましましたが食べずによしました。

第四日。昨日と同じく規那鹽入りの赤いビスケットを又やつてみました。白の方は見向きもしませんでしたが、黒は一度だけ啄んでみてそれで懲りてしまひました。白は此の日珍らしくも脚を擧げて頭を搔かうとしましたが體の平均がとれないのでうまくいきませんでした。處が此の白、黒と一

腹で親の側に居る雛の方は、いつから出来る様になつたか知りませんがこんなことはとうから達者で出来ます。箱に砂を入れてやりました。

第七日。白は砂皿の内を盛に引搔き廻してゐました。未だ黒の引搔くのを見たことはありません。後白は兩足を交るゝ使つて搔いた後恰も食物でもあるかの様に搔いた後を嘴で啄いてゐました。箱から出してやると白はチヨコ／＼と中々よく走ります。不意の嘔に度膽を抜かれて逃げ惑ふた様は餘程可笑くありました。暫くして氏は初めて黒

でどんな幽な音でも聞きつけます。白も黒も日向に立つた儘で寝入つてそれから座るといふより寧ろそのまま、どうと倒れるのが癖であります。時には側臥することもありますがそれは極く稀であります。午後又々例の赤い苦しい御馳走をやりました二羽共吃驚して中でも小心な黒は警戒の聲をさへ立てました。けれどもちきに勇氣を回復してビスケットの周圍を廻つたり、其の上に乗つたりしてゐましたが口には決して入れませんでした。後砂皿をやりました。

第六日。白が初めて引搔ける様になりました。下敷の紙に濡れた處が出来たのを引搔いたのであります。黒は日向で丁度牝雛のする様なませた物ごしで砂を浴びて居ました。二羽共音には實に鋭敏

の引搔くのを見ました。やはり白と同じやうに下

敷の紙の濡れた處を二度許り引搔いたのであります。何しろ初めてのことと未だ脚がぶるくと震

れるので搔いた跡ははつきりとしてゐません。黒も他の鳥の例に洩れず、先づ最初に片脚で引搔くことを覚え、次に両脚を使ひ分け最後に搔きなが

ら啄む様になつたのであります。白は時々後方に走ります。まう今は氏が手を出してもそれを逐ふて来るやうなことはありません。

第八日。白は今少しで人手を貸りずに獨りで箱の外に飛び出ることが出来ます。氏が箱から出してやつた時白は兩の翼を擧げて數尺も飛び廻りました。けれども斯うして飛び廻るだけで、それ以上戯ることもしませんでした。それから二羽して紙を引搔いたり啄いたりして餘念なく遊んで居ました。其の引搔いた紙といふのは別に珍らしいものではなく唯一一面に印刷されたものでした。二羽

共大分引搔き方が達者になつてきました。

第九日。朝の内白も黒も水皿の内で得意の引搔き廻しをやつて上機嫌で騒いで居ました。其の皿といふのは面のザラ／＼したものであります。黒は

箱の天頂まで飛び上つて嘴と脚とを働かしてやつと外に出ました。白は午後になつて出ました。苺の碎片を試みに投げてやつた處が白も黒も其の赤い色に嚇されて觸つて規那鹽の有る無しを究めやうともせず、恰も恐ろしいものであるかの如く怖がつてゐました。其の實此の苺には規那鹽は毛程もはいつてゐなかつたのです。ツルコケモ、をやつた時もやはり同様でした。二羽の中でも特に怖がるのは黒の方であります。

第十日。白は一度外に出て自由の空氣に觸れることを覚えて以來、窮屈な箱生活を嫌つて幾度押し戻してもピヨン／＼飛び出してきて仕方ないので終には箱に蓋をしました。けれどもそれを取るや

否やまた直に飛び出すといふ始末であります。斯くの如く一方に白が大騒ぎして居る間に黒は懶々と寐轉んで白の翼に抱れやうと其の身を白の體の下に摺り寄せてゐました。

第十一日。廣間で何か音がした時白か黒か孰れか分りませんが、おばあさんの雞が出すやうな警戒音を出しました。氏が嘆をした時白は椅子の脚に黒はそれと反対の方向に共に逃げていつて少時の間息を殺して蹲つてゐました。何といつてもかうして二羽一緒に居るといふのは互に力強いに相違ありません。其の證據には二羽睦しく遊んで居る時、そつと其の内の一羽を隠すと取り残された一羽は非常に悲しげな力ない様子をするのでもよく解ります。紙の上で二羽が餌を食べて居る時インキを二三滴たらしてみました。すると白は忽ちそれを啄いたり引搔いたり又啄いたりしました。それから少時他へいつてゐましたが又直戻ってきて

四度許り引搔いたり啄いたりしました。

氏は小さい鏡を持ってきてそれを自身の足に立て掛けで二羽の姿のよく映る様な位置に置きました。案の定二羽共鏡に映る自身の姿にアツと許り吃驚したのであります。氏は二羽がどうするかしらんと眼も離さずに見て居ましたら、間もなく白はつかくと鏡の前に進んで来て自分の姿を頻りに眺め初めました。其の癖餘計吃驚したのは白の方なのでした。それから後も白は鏡の前に来る毎に丁度牡雞が蹴合ひでも初める時のやうに頸を延すやら頸毛を逆立てるやらして力んでゐました。暫くして白は鏡の側面をつゝき初めました。終には鏡に向つて突進を初めたといふと可笑しく聞えますが、實は悲しい哉無經驗な白には實物との影との區別が解らぬので、巧妙な鏡の作用に騙られ自分の前には敵と信じる難より外何物もないものと獨合點して遮仁無仁進んで鏡と鉢合せの滑稽

を演じたのであります。之は白許りでなく黒もし
たのであります。然も二羽共一遍で懲りず數度痛
い経験を繰り返しました、中でも白は鏡の前を通
りながら映つてゐる像をジロリと睨んで今にもそ
れに突進しさうな様子をしますが通りすぎて何も
見えなくなると不審の眼を瞠つて又引返して來
ます。斯様にして終に鏡の前を通り越して後に廻
りました。何をするかと見て居ると、そこら中見
廻してからフイといつてしまひました。數分後二
羽連れ立つてやつてきましたが鏡の中の雛がとう
も無氣味でならぬやうでした。後白は更に獨で鏡
の前に来て胡亂の眼を光させてゐました。

第十二日。生きた地蟲をやつてみました。黒は何
の氣もなくいきなりそれを啄みましたが蠕々と動
くので驚いて思はず取落しました、すると白はそ
れを引擱んで箱から外に出たがりますので氏が二
羽共に出してやりますと白はそれをもつた儘一散

に逃げ出します。黒は今更に掌中の玉を取られた
のを悟つたといふみえで倉卒と白の後を逐ふて蟲
を取り戻さうとします。けれども白もさるもの、
見る間にそれを飲み込んでしまひました。後氏は
更に蟲を三疋やりました。白の方は大喜びでした
が、黒は氣味悪がつて死んだのをやつと食べた許
りでした。抜目ない氏は其の内の一疋に規那鹽を
塗つてやつたのでしたが白はそれに氣付かぬらし
く平氣で飲み込んでしまひました。

氏は白と黒との二羽をこれまでに育て、から親
の牝雞に返してやりました。これからのお話はそ
れから後の觀察であります。

夜になると二羽共親の雛と一緒に寐ます。けれ
ども白も黒も牝雞が二羽を繼子扱ひにして啄いて
はいぢめるので、夜が明けるのを待ち兼ねてサツ
／＼と親から離れて勝手に遊びにゆきます。其の
行く處は十尺許り離れた雛の元で、そこで砂を引

搔いたり啄いたりして、兄弟の雛から全く離れ二羽きりで遊ぶのであります。親がコツ／＼と呼ぶと恐がつて反つて逃げていつてしまひます。十五日目に林檎の赤い皮を投げてやつたら、見た許りで互に警戒の聲を上げながら逃げていつてしまひました。けれどもそれを引くり返して白い方を上に向けてやりましたら、其の軟かい部分だけを食べたのであります。春といつても四月初めの未だ定まらぬ季候は時に暖く時に寒いので、暖を取るため氏は此の日二羽を臺所に連れていきました。そこで白と黒とは生れて初めて猫といふものを見たのであります。初めの中は猫をひどく恐れて逃げ隠れてゐましたが後になつて火が消えて室が寒くなつた時黒は何かのはづみで前後不覺に寐入つてゐる猫とそれ／＼の距離に來ました。娑婆の風に當つて以來未だ一月と経ぬ白と黒とが猫に對して別に苦い経験を持つて居るといふ譯ではありま

せんが雛に比べては第一に大きさも形も異ふ怪物の猫を眼と鼻の近くに見ては戦慄しないのが偽であります。黒が自分の危い立場を知つて愕然と身を退けたのは無理もありません。けれども相手の猫は正體もなく熟睡して居て髭一本動さぬのに黒は漸く安心してドツカと許り座りこんたのであります。白は注意深い眼付で始終黒と猫とを見比べて事の成行を窺つて居ましたが、之も亦安心したものと見えて同じく心地よげに眼につきました。

第十六日。不慮の災難で黒が跛になつたので氏は二羽を一緒にして箱に入れ暖爐の後に置きました。日頃元氣の白も兄弟の黒が病氣といふのでいつも様に暴れもせず、箱から飛び出しても遠くへはゆかないで数分毎に戻つて来ては静にピヨ／＼いひながら慰め顔に黒の周圍を廻つてゐました。午後になつて黒は大に元氣を回復して箱の中で跛引き／＼餌を啄んでゐました。白は黒の病の怠つた

のをみて安心したものか今は黒の側を離れて例の通り快活に遊び廻つてゐましたが、黒のビヨ／＼といふ呼聲の聞える毎に一さんに駆けつけて少時之間黒を慰めては又去つて遊びました。それから後程經て氏は二羽を解つた許りの一腹の雛と一緒にしてみました處が其の親とも子ともよく慣れ陸んだのであります。

概していひますと、白は黒に比べて體も大きく體質も丈夫であります。又好奇心に富んで居るといひませうか注意深いといひませうか、それに黒からみると遙に大膽不敵であります。白も黒も種々難多な啼聲を出します。その聲は雞の雛特有のものとは全く異つてゐて反つて雀の聲に似てゐます。其の理由は恐らくは二羽が飼はれてゐた室の窓近く絶えず往來する雀の聲を眞似た結果と思はれます。斯くの如く鳥の其に摸倣の行はれますのは普通のことで少しも怪むに足らぬと申しますのはせましたが、それきりでやめてしまひました。

は、凡そ鳥類が他の鳥の歌を眞似て其の通りに歌ふことの出来ることはよく人のいふことで、又實際不器用な方では有名な雀さへ教育次第で他の鳥の歌を上手に眞似ることの出来るのは古來色々の人精緻な實驗に徴して明なことであります。前に白と黒とが色々の聲を出すと申しましたが其の聲の内には飢餓を訴へるもの、快不快の情を洩すもの、又好奇心、警戒、恐怖、譴責を現すもの等の區別があります、二羽共に目醒めて居る間は是等千差萬別の意味を現す啼聲を巧に使ひ分けて、所謂互の會話を交換するのであります。

次に氏は白や黒を觀察したと同様の方法によつて、別の四羽の雛を觀察しました。其の内の二羽は砂の上で飼ひ、他の二羽は底に紙を敷きつめた箱の中で育てました。二日目の午後、砂の方の雛の一羽は引搔かうとする如く片足をぶる／＼と震

それから二日、三日、は無事に過ぎ四日目になつて同じ雛は初めて本當に引搔きました。それと一緒に居る雛は餘程おくれてやつと引搔き初めましたがそれでも箱の中の二羽に比べると遙に早かつたのであります。

規那鹽の實驗は前と同様の結果を齎しました。

四羽共一度で懲りてしまつて二度と再び赤いものには觸れ様ともしませんでした。六日目に四羽共

窓臺から床迄距離にしたら一尺六寸もあらうかと思はれる處を飛び下りました。四羽の中で二羽だけは二尺九寸の距離を飛べますけれど、他の二羽にはこの藝當は出来ません。又其のよく飛べる中の一羽は四尺七寸ある机と床の間を飛び下りました。けれども五尺九寸の距離を飛ぶだけの力は未だりません。以上はハント氏の研究の大略であります。

面白かつた過去の追憶は、終生人を華やかな幼

年時代に戻らせるといひます。ウォズラウスもいつたやうに幼年時代は牧場や、杜や、流水や、其他此の下界のあらゆる尋常の現象も、奇しき精靈の光りに包まれて宛ら夢裡に見る如く清く雪く鮮かに見えるものであります。思想の泉の涸れ感と忽ちに清新莊麗の情想が胸を衝いて湧き出るものであります。

そこで話が前に後戻りしますが、人の父たり母たる人が心して子供に其の幼い間即ち最も強い深い印象をうける幼年時代につとめて動物に親しむ機會を與へる様にいたしますと、やがて子供が成人して後其の美しい樂しい記憶をたどつて科學者となりて研究の上に一新生面を開く上に成功するこ事が出来ると思ひます。

教へない教育

倉橋惣三

一

教へない教育と云ふ妙な題を出しておきました私は、教育を三種に分けて、教へる教育、間接に教へる教育、それから教へない教育と斯ふ分けられると思ふのであります。教へる教育と申しますのは即ち普通にいふ狭い意味の教育のことでありまして、小學校以後即ち學校と云ふ所でいたします課業であります。其次の間接に教へる教育と申しますのは、主として遊戯を利用してしまして、子供の方では今先生に何か教はつて居る、課業を學んで居ると云ふやうな者は全く有りませんで、唯面白く遊んで居る間に此方から適宜の手段を施して多少の教育的結果を生ぜしめると云ふのであり

ます。第三の教へない教育といふのは、妙に反語を用ひました様な言ひ方であります。是れは唯今申上げました二つの場合から推して考へますと直ぐ御分りになる事であります。即ち教へる方でも其時、其場合に必ずしも今子供を教へて居るのだと云ふ明かな考は有たない。勿論子供の方でも今教育を受けて居ると云ふ考は少しも自覺して居らない場合でしかも大に教育に關係のあることであります。今日は此第三の教へない教育と云ふことに就て少しく申上げて見たいと思ひます。

教へない教育と云ふのは他の言葉を藉りて申しますれば習慣を利用する教育であります。即ち子供が識らずぐに習慣を付けられると云ふことが

教へない教育の主旨であります。それならば子供の習慣と云ふことはどう云ふことかと申しますと、是れには已にいろ／＼の説明が付いて居りますが、私は之を三つに區別して考へたい。即ち動作の上の習慣、考への上の習慣、感じの上の習慣と斯う三つに分けて見たいと思ひます。普通子供に癖が付いたとか、或は子供には善き習慣を養はせなければならぬと云ふやうなことを申されます時には、大抵は此動作の上の習慣が主になつて居るやうに察せられるのであります。例へば朝早く起きる習慣を付ける、行儀宜く坐つて居る習慣を付ける、話をする時に妙な手付きをしない様な習慣を付けると云ふやうなのは多く動作の上の習慣であります。併し是れも實に大切なことであります。第二の考への上の習慣と申上げましたのは子供の頭脳が算術に慣れて来る、英語に慣れて來

る、或は書取に慣れて來ると云ふ如き意味に於ける習慣であります。子供に學問をさせますには、子供に興へた學科や課業を丁度鞄の中に何か入れるやうに、子供の頭脳の中に入れてしまふだけです。それで教育が出來たと云ふ譯ではありません。それも亦一方に於ては大切なことでありますけれども又一方に於ては子供の頭脳の働き方を學問の方へ向けることが大切なのであります。詰り遊び癖が付かずには、夫々の學科の勉強癖をつけると云ふことが教育の主眼なのであります。第三のは感じの習慣、普通に道徳的習慣と稱されて居る類のものが即ち此處で申上げる所の感情の習慣と云ふことになるのであります。

最初に申上げました動作の上の習慣と云ふことを他の言葉を以て平易に申上げますと、詰り御行儀と云ふことであります、其御行儀と云ふことを心理的に解釋して見ますと、詰り意志の修養に

なるのであります。きちんと一時間も坐つて居る時に疲れて来て足を横へ出したいけれども我慢して居るやうなことは、外から見ますれば行儀が善くなつたと云ふだけのことでありますけれども、之を子供の心理の中に立入つて考へて見ると、詰り子供の意志がそれだけ強いと云ふことになるのであります。

處で行儀の習慣は初めは大抵いやなのを外の力で抑へられてするので後で褒美が貰へるとか、叱られるとか云ふやうな結果を考へていはゞ無理にして居るのであります。詰り駆けを外から受けたのであります。處が感じの習慣といふ方では外の力によるのでなく、内から、どうしても、せずに居られぬといふ心持を養はうとするのであります。即ち理屈は知らぬがどうも氣が済まぬ、或はさう云ふ氣がしてならぬと云ふやうになるのであります。大人でも始終有ることであります、知識の

上では是れは善い、是れは悪いと云ふ區別は能く付いて居り意志の上でも可なり我慢する力がありまして、唯感情の上でどうも意志が鋭り知識が曇つて來ると云ふやうなことが常に有るのであります。又知識の上ではよく分らないが感情が動ましてそれをすると云ふやうな場合も出て來るのでありますし、平常吾々の行つて居る行為又子供が成長して後、世に處して行く一生の行路に感情の影響が中々重要な働きをするのであります。

扱てその大切な感情がどう云ふ風に吾々の生涯に影響して来るかと云ふと、先づ大きく考へて二つの働きをして居ると思ひます。一つは感情が禁止してくれる所以であります。例へば子供が相當の年齢になりまして外から誘惑を受けると云ふやうな時には、外から来る誘惑の力と云ふものは非常に強い、又自分もこれに従ひ易いやうな傾向がある、こればかりでなく誘惑するやうな人はなかなか

か巧いことを言つて口を極めて説きますから、誘惑される方では成ほど向ふの言ふ通りになつても悪い事でないのかも知れぬ、或は其方が宜いのかも知れぬと云ふ様に知識の上で欺される場合があるのであります。けれどもさう云ふ場合に感情が働いて居りまして、小さい時に母親から受けたところのいろいろの感情の習慣と云ふものがあつて、どうもあの人の言ふやうにするのは氣が済まぬ、成ほど是れは此場合では大した悪いことではないかも知れない、けれども、併し之に従つてはどうも氣が済まぬ、何となく安心が出来ないと云ふ様な感情が働いて來る事があるのであります。もう一つは此感情が吾々を加勢することがあるのです。多少話が外れますが、例を明かにす爲めに青年のことで申上げますと、青年の小説を読むのは害があると云ふことを種々申されます、又實際に小説が種々な害を與へることもある

のであります、善い小説は無論利益を與へますが悪い小説を讀んだ人がどう云ふ風に害を受けるかと云ふことを考へて見ますと、多くの人は小説に依て悪い事を覺えるから悪いといひます。假令ば、甚だ下等な例であります、小説を讀んでから泥坊を始めた、或は小説を讀んでから汚い行を始めたと云ふやうなことが、罪人を調べますと幾らも材料が舉つて居ます。さう云ふ風に小説の中に書いてある事柄を讀んで今まで知らなかつた事を覺える、これでありますから小説は非常に害が有ると言はれて居ります。成ほど是れも大に心配しなければならぬ要點であります、こう云ふ風に今まで知らなかつた悪い事を覺えると云ふやうな知識の上の働くよりも、寧ろ感情の上で以て悪い小説を讀んで居る内に、其惡事に對する憎惡の感じが醸つて來るのであります。即ち今までに泥坊のことなどは非常に悪い事だ、泥坊と云ふもの

は實に厭やなものだ、泥坊が何故厭やか悪いかと云ふ議論はしないでも、何しろ厭やだ悪い事だと云ふ考をもつて居る。處が其人が泥坊のことの書いてある小説を幾度も讀んで居ると云ふと、成ほど知識の上では泥坊するのは宜くないと云ふ判断は變はらないけれども、感情の上では習慣が付いて來てそんなに悪い事だと、云ふ感じが滅じて來るのであります。それと同じやうに子供の感情の養成をなす時分に若し悪い習慣でも付きますと云ふと、大きくなつてから、此事は悪い事であると知識の上で合點致しましても、併しどうも自分の感情がそれ程にそれをいやだと思はない様な状態になるのであります。例令ば吾々は悪臭のある油などを嗅ぎますと厭やな感じを起す、之を嗅げば毒であると云ふことは知らないが、何しろ厭やだといふ感じが鋭く起つて来る。所が段々其臭に慣れて、即ち其臭が起す感じに慣れて來ると、此油

は臭い、有毒だと云ふことを知つて居ても、それ程に厭やでなくなつて來のと同じであります。昔から朱に交はれば赤くなる、悪い友達は避けよと云ふことを言ひますが、成ほど白い糸が朱に交つて居れば赤くなるかも知れませぬ。吾々も悪い友達に交つて居ればそれに倣つて悪い事をするやうになりませう。けれども假に白い糸が赤い糸に染る迄に至らないとしても、即ち吾々が悪い事を倣はないとしても其悪いと云ふことに對する感じが非常に鈍つてくる事と云ふことは甚だ怖ろしいことであります。私共の友人に罪人の研究を専門として居る人がありますが、其友人の話に泥坊を幾度もして監獄に出たり入つたりする者でも悪い事だといふことは實に能く知て居る。けれども其人達の中には、どうも悪いと云ふことは能く承知して居りますが、是れは私共の仕事でありますから出てからもやるかも知れませぬと云ふのがあるそ

うであります。即ち人の物を盗む事の悪いと云ふことは知つて居るけれども、幾度もやつた結果感情が悪事に慣れて、そんなに悪い事と感ずる力が自然鍛つてしまつて居るのであります。即ち斯う考へて来ますと、子供を道徳的に善良なるものに造り上げるには動作の習慣も大切であります。眞に善良な子供を造り上げるにはその外に強い正しい感情の習慣を養ふことの大切なることが分ります。只に子供が意志の力で悪い事をしなくなるやうに造るよりは悪い事が出来ないやうな心に育てなければなりません。

そこで一般に此子供の習慣——癖、動作の上でも、知識の上でも感情の上でも同じであります。癖と云ふものはどうして出来て来るか。癖の出来てくる條件を少し數へて見たいと思います。古來學者が習慣養成の條件として擧げて居りますのは大きく分けて三つあるのであります。尤も之れは

大人に就て言ふて居りますが、第一は最初の決心が大切である、其習慣は自分が得やうとする第一念、第一の決心が非常に固くなければならぬと云ふのであります。第二は其付けやうと思ふ癖、自分で得やうと思ふ習慣は始終之を續けて行かなければならぬ、長く續けて何時までもやつて居なければならぬと云ふことであります。第三は其習慣が付いてしまふまでは決して例外をしてはいけないと云ふことであります。例へば子供は楷書を教へましても上の線を真直に引いて横とも真直に引けと云ふやうに筆の動き方の習慣を付ける。眞直に引かうと云ふ初一念を充分に固くする。どうでも宜いと云ふやうなことでなしに眞直に引かなければならないと云ふ一念を非常に強く有たせる。さうしてそれを毎日續けなければならぬし、それをやつて居る間は他の行書だの、草書などは教へない。即ち竹けんとする習慣に對して例外をしな

い。此三つの事が大切であると云ふことを言はれて居るのであります。

處が此習慣養成の三要件と云ふものを子供の場合に就て考へて見ますと、成ほど大人でありますならば自分で斯う云ふ癖を付けやうと思ふのでありますからして初一念と云ふものが非常に働くのであります。けれども子供の場合に於きましてはまだ此決心の能力も確乎として居りませぬから、此の第一要件を子供に要求することは出来ない。成ほど一通りの決心をさせるやうな約束をさせる事もありませうけれども、併しこれは當てになつた話ではない。明日から必ず早起きするやうになさい、さう云ふ併を付けなければいかぬと頻に話をすれば、子供の方でもそれが自分の身體の爲めにも宜いことであると合點し、お母さん明日から早起をしますと約束することはしましようが、そもそもそんなに當てにし得べきものではない。後

に子供が破つた時に坊は何月何日斯う云ふ約束をしたではないか、已にさう約束をして居るならばそれを破つてはいかぬと責めました所で、子供が約束をするとか、決心をするとか云ふやうな力は元來弱いのでありますからして、さう云ふ大なる要求をすることは出来ないのです。然らば子供の場合ではどうしたら宜いか、子供に對して初一念と云ふものが要求し得ないとすれば、それに代へるに何物を以てしたら宜いかと言ふことになります。私は之を周圍と云ふ言葉で廣く言現はしたいと思ふのであります、是れから其周圍と云ふことに付て御話を申上げて見やうと思ひます。要するに此教へない教育の最大要件は周圍の問題なのであります。

二

そこで子供を中心にして周圍と云ふことを考へて見ますと、大別して三つになります。第一は

社會が子供の周圍となる。東京に居る子供、田舎に居る子供と云ふやうに分けまするならば、東京市と大阪市と或は田舎と云ふものは子供に取つては社會的周圍が違ふのであります。子供も社會の一員でありますて、家庭の中に居りますと同時に社會に出て遊び、或は學校に通學の途中社會を通ると云ふことになれば、社會と云ふものの子供に對する影響は非常に大きい。世間では往々教育とは學校の役目であるが如く考へ、又もう少し進んだところで家庭教育位のことに考へられて居りますけれども、少くとも教育の三分の一と云ふものは社會がすると考へなければならぬのであります次には天然が非常に影響して來るのであります。子供が山國に住つて居るとか、海邊に住つて居るとか、暖かい土地に生れたとか、北方の方の寒い國に生れたとか、云ふことが子供に及ぼす影響は非常に多いのであります。一體四季の變化なども子

供に著しく影響を及ぼすのでありますて、デキステルと云ふ人などは氣候及び天氣、降雨と云ふやうなことが子供に影響を及ぼすことをいろ／＼調べて居ります。それから第三は家庭であります。今日は特に此の家庭を中心にして申上げやうと思ふのであります。

元來此いろ／＼の周圍が子供にどう云ふ風な關係で影響して來るかといふことを考へて見ますと先づ三種有るやうであります。その第一は模倣性即ち真似であります。

一體此真似と云ふことにはいろ／＼程度があり種類がありまして、普通には周圍の物を倣はう、真似しやうと云ふ考があつてするのであります。又子供自身は全く何の氣も無く、何の受取らう真似しやうと云ふ事も考へないので周圍が子供に働いて来る場合があります。それは即ち心理學の方で言ひますと暗示と云ふことになるのであります

暗示と申しますのは御承知であります。普通催眠術の場合に使用されて居るので、或一人の者に催眠術を施しましてそれから其の被術者へ色々の命令を與へること、それを暗示を與へると云ふのであります。あなたの右の手は曲つたなりで逆も上りませんと云ふ暗示を與へますと、此人は別に何も考へるでもなく理窟を思ふのでもなく、決心も注意も意思も何も無いのでありますけれども、唯其の暗示が働いて手が上らなくなつて仕舞ふ。又あなたの腕に針を刺しても痛くないと云ふ暗示を與へますならば針を通しても其人は少しも痛みを感じない。さう云ふ風に暗示と云ふ言葉は催眠術の方では催眠術を掛けられた人が、何でも此方の言ふ通りに化せられて仕舞ふと云ふ意味に使つて居るのであります。所が暗示と云ふものは何も催眠術を施す場合にのみ限りませぬので、平常に始終受けて居るのであります。例へば大人

でも時々有ることであります。大勢人の集つた場合に誰か一人欠伸をする。さうすると自分も遂に欠伸びをすることがある。又學校などに大勢集つて居りまする時に、一人が笑ひ出すと云ふと別に何の理由とも知らずに外の人も一緒に笑ひ出します。向ふから怒つたやうな顔をした人が来ると云ふと、何故とも知らないけれども、今迄ニコ／＼して居た自分の顔が肝癪面になつて仕舞ふ、と云ふやうなことは能く有ることであります。詰り相手の人の様子が此方に移つて仕舞ふのであります。それが子供の場合では特に著しいのであります。それからもう一つ、子供が周囲の影響を受けるには、少し固くるしい言葉であります。生理的影響と云ふのがあります。一體吾々には氣さへ確かであればどうとか、或は心で斯う思つてさへ居ればどうとか、自分の心と云ふものは確乎りしたもので、強いものであるやうに考へて居り

ますが、而も吾々の心は、周囲から受ける、此の生理的影響と云ふものと非常に大なる關係を有つて居るのであります。殊に吾々の氣分などは多くは自分の生理的狀態と大に關係して居る。人は笑顔で居なければならぬと云ふことを知つて居つてそれを實行しやうとしても、生理的に何か障害があります時にはどうも心が負けて仕舞ふ。さう云ふ風に此生理的の關係と云ふものは吾々に非常な影響を及ぼして來るのであります。

そこで模倣とか暗示とか或は生理的影響とか云ふものに依て子供はいろく周囲の影響を受けます、其周囲と云ふものの中では、家庭からはどう云ふ風に影響を受けて來るか。是れからその御話に移るのであります。

家庭と云ふものを子供の周囲と云ふ意味に於て解釋しますと、いろいろ複雑したものであります

即ち物的周圍、及び人的周圍、といふ此二つに働くのであります。物的の周圍と云ふのはどう云ふのであるかと言ふと、幾らもありますが、先づ第一には近所と云ふことであります。是は申し詰り家の近所如何といふことが子供には非常に影響を及ぼして來るのであります。古い話で有名な話であります、孟子のお母さんが子供の教育の爲に三度家を引越したといふ位であります。

それから次は其家の建物の具合と云ふものが子供に取つて物的周圍になるのであります。即ち光線の充分、不充分、空氣流通の良否、又は、日の當りの宜い暖かい家であるか、日蔭のやうな寒い冷たい家であるかと云ふやうなことが、今まで醫者の方から衛生上の問題として、言はれて居つた以外に、物的周圍の一要件として子供の心に大きな影響を及ぼして來るのであります。一體光線や

温度や、空氣の清汚が人の氣分に影響を及ぼすことは大變なもので、若し其家が之れ等の條件に缺けて居るならば氣分教育の大部分は全く失敗に歸して仕舞ふのであります。之れは又子供の脳の力にも大に關係することと、其の一例を申しますと近い頃亞米利加の或人が多くの學校の教室に就て其溫度をいろいろに加減して見て、寒暖計何度の時間には學業はどの位出来る、何度以上の時には学生の注意は如何なる状態になるかと云ふ類のこととを調べて見たのであります。さうして其の結果室内の溫度が子供の學業若くは行儀等に如何に大なる影響を及ぼして来るかといふことが明確に證されたのであります。

其次是家中に用ゐまする道具若くは家の裝飾品の類が、やはり非常な影響を子供に及ぼすのであります。例へば掛物や額を一つ掛けて置くにしましても、それは餘程いろいろの問題に影響して参ります。勿論之れは大人の方で裝飾の目的を以て掛けるのでありますからして、之を子供の教育の方からばかり論じて仕舞つては餘り殺風景な話になるのであります。併し之れも教育の見地より考へて見まする時には、大に注意を要することであります。但し、こゝで考へることは只に其書なり畫なりの意味内容に關していふのではあります。成ほど是れも非常に大切な事で、掛けられません。成ほど是れも非常に悪い辭句、悪い繪が之を見る子供に意味を了解しての話で、即ち已に教へる教育の部に影響を及ぼすことは言ふまでもないが、それは意味を了解しての話で、即ち已に教へる教育の部に屬します。けれどもそれでなしに唯掛物に現はれて居りまする筆力、字畫若くは表裝の色合、或は額の形等、即ち其中に如何なる意味のことが書いてあるかと云ふ問題でなしに、單に形の上の諸點が子供に非常な影響を及ぼして來るのであります。置物にしましても亦活花にしましても、植木にし

ましても、皆やはり同じ關係を有つて來るのであります。

こういふ事が如何に子供の心に影響を及ぼすかと云ふことは平常は餘り感じませぬけれども、假令ばお正月などによく分ります。家の間毎に輪飾りを掛ける、或は今まで掛けてあつた掛物を取換へて大切な大きな掛け物をかける、或は今まで活けてあつた多少萎びた花などを取除けて新しき花と活け換へる、或は塵埃の爲めに汚れて居たのを掃除してきちんとすると云ふやうな時には、子供の心に非常な變化を來して、昨夜まで暴れて居つたのがいやに大人しく済し込んで妙に改まって仕舞ふと云ふやうなことがあります。成ほどお母様なり、お父様なり、お正月になつたら大人しくなければならぬ、お正月には大人しくするものであると云ふことを教へた關係も大に與つて力はありませんけれども、又一方には正しい周囲の規律が子供に暗示を及ぼして來るのであります。

三

それから次には家庭に於ける人的周圍に就て申上げて見たいと思ひます。即ち家中に居る人がどう云ふ風に子供に作用して來るかと云ふ話に移るのであります。但し家内の人々が子供に何か教育やうとして居る時のこととは茲には申しませんので、そんなことを少しも考へて居ない場合に、しかも非常に影響を及ぼして來ることを申し上げるのであります。

第一は家内の人の顔色であります。學校の教育でも此事は非常な問題であります。小學校の教育として先生の教へ方が巧いか巧くないか、先生の言はれる話が宜いか悪いか、教科書に書いてあることの宜いか悪いかと云ふ類の問題の外に、先生の教壇に立たれた時の態度、之れを教育の方では教容と言ひますが、其態度が非常に重要なのであります。極端な例ですが、先生が教壇に立つて

人は眞面目でなければならぬと云ふことを言ひながら、自身が頗る滑稽の態度を示されて居たならば、その教訓の力は態度が子供に與ふる暗示の力を以て帳消しにされて仕舞ふ。さう云ふ風に吾々の顔色、家内の態度と云ふものが子供に知らず／＼の中に非常な影響を與ふるやうになるのであります。朝人に逢ふた時分に向ふ人がニコ／＼した人であつたならば此方も其日一日は愉快であるけれども、其人が陰氣の人であつたならば此方もそれに引込まれて陰氣になつて仕舞ふ。又是れは何處かで有つた話でありますが無い話かも知りませぬが、或人が朝早く起きて郵便局に行つた、所が局から顔を出した官吏が非常な肝癪持ちで、短気な人であつて、朝早く此の方が郵便局に行つたものであるから眠い所を起されたので、非常につけんどんに顰面をして應對をした。其爲めに其人もやはり厭やな氣になつて顰而をしながら其處

を出た。さうして町に出て來ると向ふから知つた人が來たけれども、郵便局で怒り付けられて氣がむしやくしやする時であるから、其人に碌な挨拶もせないで行つて仕舞つた。すると第二番目の人も不快を起して其次に逢つた人にやはり顰面で挨拶した。さう云ふ風に郵便局の受付のものが怒り付けた爲めに其町中が一日肝癪面になつて仕舞つたと云ふことあります。廣い社會、廣い都會等でさう云ふことがあると大變なことでありますけれども、學校などにはこれが非常に有るのであります。生徒が大勢集つて居る所に校長さんが入つて來られる、其時に校長さんが笑はうが、厭やな顔をして居られやうが、眉間に八の字をよせて居られやうが、教授としては別に何んでもないことでありますけれども、その先生がニコ／＼として生徒の一人にでも言葉を掛けくれると云ふ具合であれば、其一日中、學校は非常に氣分の宜い穏

かな學校になれる。けれども朝來た時に先生が何か自分の家に面白くない事でもあつて、學校に来てから其餘憤で以て生徒に碌な挨拶もせないやうであると、たとへいくら先生が修身の時間に、人間は氣が軟かでなければならぬと骨を折つて教へられて、最初の顏色が元になつて一日厭やな日になつてしまふ。それ故に學校をニコニコ學校にするか、肝癱學校にするかと云ふことは詰り校長や先生の顔付次第でどうにでもなる。況やこれが家庭と云ふ極く狹い所に於きましては非常な影響を及ぼすのであります。能く有ることで、雇人などが大勢集つて、今日は御主人は機嫌が宜い、イヤ何だが今日は怖い顔をして居ると云ふやうなことで、其店が愉快な店になつたり陰氣になつたりする。又朝起きて子供がお早うと言つて親の所に行つた時に、お父さんなりお母さんなりが其子供に對しまする顔付一つで以て其子供の一日の氣分

と云ふものを非常に支配するのであります。其次には顔やぢつとして居る姿等の外に舉動がやはり非常に暗示力を及ぼすのであります。先程催眠術の時の例に申上げましたやうに催眠術を向ふの人に掛け置きまして右の手を擧げなさいと言へば、其人は右の手を上げる。又いろ／＼精神病の方にもさう云ふ風のことが幾らもある。即ち相手のする通りどうしてもせずに居られない氣狂があるのであります。此方で頭を搔く眞似をすると向ふでも其通りに頭を搔く。それから聞いて見ると私はそんなことはすまいと思つて骨を折つてつとめるのだけれども、つい人のやる通りにやつて仕舞ふのであると云ふことであります。是れは氣狂若くは催眠術に掛つた人の話であります。さう云ふ状態は或低い程度に於ては總て的人に皆有るのであります。家内のものが非常にぞんざいな、そつかしい人でありますと、其家の子供はやはり

そへつかしくなつて仕舞ふ。あの子供は親の様子に能く似て居ると云ふ様な事を言ひますが、それは何も親の方で自分の様子を似させ様と思つて子供を仕込んだ譯ではない。子供の方でも親の様子に似なければならぬと骨を折つたのもないけれども、自ら親の舉動に子供が化せられて仕舞ふのである、それ故に沈着なる親を持つて居る子供は沈着の性質を帶びるし、愚圖くな家の子供はやはり愚圖になる、と云ふやうに、周囲の人の舉動が非常に影響を及ぼして來るのであります。

それから其次の大切なるものは言葉であります家庭に於きました親たり、姉たり、兄たるものは使ふべき言葉の注意を細かにしなければならぬと云ふことは多く言はれて居るのであります、是れもやはり先程の掛物の問題と同じやうに多くは言葉の意味内容に就てのみ注意されて居ます。是れも言ふまでもなく大切な事であります、併

し言葉に就ての注意は意味、内容ばかりではない。その言葉の使ひ方即ち言音の速さとか晚さとか或は聲の調子とか云ふやうなことが矢張り大に子供の心に影響するのであります。人間は快活でなければならぬ、坊は活潑におなりと云ふやうなことを低い愚圖々々とした聲で言つた時には子供は成ほど活潑でなければならぬと云ふ意味は了解するかも知れませぬが、現に不活潑の聲を聞いて居つてはどうも活潑にはなれない。或は女の子などに優しくおしよと云ふことを優しくしろいとでも言ひましたならばどうであります。殊に人の氣分に及ぼす相手の人の音の高さと云ふものは非常な影響を及ぼすのであります。此中には音樂に達しておいでのお方お澤山お居でになりませうが、ピアノにしましても、オルガンにしましても、音樂の音と云ふものゝ聽衆に與へる影響は、其歌の内容と云ふやうなことばかりではなくして、高さ低

さの音色と云ふものが非常に人に影響を與へる。心理學の方では人の感情を測つて見る器械がございまして、例へば吾々が腹を立つ時は血液が早く廻るとか、氣がザワ／＼して愉快な時には呼吸が早くなつて血液もやはり早くなる、氣が沈んでしまつて悲しい時には血液が早く廻らないと云ふやうな點からして、血液の循環及び脈搏の數等に依て其人の感情を測量することがある。そこで一方で音樂を弾いて其人に之を聞かせる、其時に脈搏を測つて見ますと如何に樂器の響きの高低が人の感情に影響して来るかと云ふことが明に分るのであります。吾々がお互に會話しまする時にもその發する音の高さが非常に大切なものです。況や家内中で始終使つて居る言葉の調子が子供の心に及ぼす關係と云ふものは著しひ問題になつて來るのであります。是れは外國にあつた事で或本に書いてあるのであります、お母様が子供に詩

を吟じて聞かせた、誰の詩でありましたか子供には逆も分らぬやふな大層豪らしい詩であります。さうするとお母さんが宜い聲で節面白く吟じた爲めに子供は嬉しがつて實に面白いものだと喜んで居つた。そこでお母様がそれで止めれば宜かつたのであります、が、今度は餘計な御世話で以て其詩の意味を説明してやつた。是れは人生のどう云ふ問題に觸れて居るの、宗教上の斯う云ふ意味を歌つたものであるのと精しく説明した成る程お母さんは詩の韻節よりも詩の内容が氣に適つて居られるのですから説明も宜いだらうけれども、子供には迷惑至極でそんな六かしいことは厭やだ。今まで意味なしで聞いた時には面白かつたけれども講釋を聞かされた時には厭やになつて仕舞つたと云ふ話があります。さう云ふ風に吾々の言葉を出しまする時には言葉の内容とか意味とかの外に音の形式も非常に大切なものになるのであります。

聖書の箴言に軟らけき言葉は憤りを止める、荒らき言葉は怒りを勵ます、とありますのはその言葉の意味のことでもあります。が又實に能く此の場合の心得にも當ります。向ふの人が怒つて來たから此方で謝つてそれを宥めやうとする時分に、御免なさいませ、と同じ言うにしましても、やさしく言へばこそよいので荒々しく言つた時には、向ふの人は却つて益々怒つて仕舞ふ。其の反対に非常にむきになつて怒つて居る人に向つて婉曲に軟かい言葉使をすれば、少々位向ふの悪口を言つても怒が解けるかも知れませぬ。斯云う風に總ての教育の内容で子供を感化するといふことは教へる教育の受持であります。家庭に於ては教へる教育も無論しなければなりませんが、多くの場合には此周圍と云ふものが注意されずに居るのであります。さあ是れから御話を上げます、是れから坊の教育をして上げるから教

育を受ける準備を爲さいと言つて、お母様が子供に差向ひになつた時ばかり、お母様が子供の教育の影響者と考へたら大間違になります。朝から夜までそれこそ寝ても起きても子供と一緒に居る間自分の一舉一動は總て教育の影響を小供に與へると云ふことになるのであります。

然るに其周囲の影響で子供を感化する程度が低い爲めに、吾々は子供に向つて種々の訓誡即ち教へる教育を與へる必要が起つて来る。例へば子供に孝行者の話をして子供は面白く聞いて居る、さうして其の話を結ぶ時に、だから坊やは孝行な子にならなければいけないと一言云ひましたならば即ち、訓誡に移つたのである。處でかかる訓誡の言葉を添へなければならぬと云ふのは、詰り今まで長く話をしたことが子供に充分に影響を與へて居ないから、訓誡と云ふ極めて下手な方法で子供に教へ込むことになるのであります。で實際を

考へて見ると吾々は子供に對して、どうも此の訓
誠の言葉が多過ぎはしないかと思ふ。若し日頃
子供に教へざる教育が充分に行届いて居るならば
何もそう／＼事々に訓誠の手段を出す必要はない
これは詰り眞の教育者としての自分の力が足りない
いと云ふことを證據立て、居る譯になります。處
が又、それだけならば未だよろしいが、實際上、
餘り訓誠が多過ぎると其の爲に却つて教へざる教
育の効果が減つて仕舞ふことがある。假令一氣持
の宜い室にでも連れて來られて子供が愉快に大人
しくして居る。即ち周圍の影響を充分に受けて子
供が大人しくなつて居る、其時に坊は大人しくし
なければいけないよとでも、餘計なことを言はれ
ると、子供は却つて暴れ出して仕舞ふ。詰り知ら
ず／＼に受けて居る周圍の影響が意識的に移つて
来て、そのためふだんの地が現はれてくるので
ある。先程御話をしましたやうに孝行の話を聞い

て子供が充分感じて居る所に、だから坊やも孝行
をしなければならぬと言はれると、子供の方では
又始めたなと思つて、今迄折角受けた感じが半分
は無くなつてしまふ。處が訓誠だけならばまだよ
いのであります。それがもう一つ嵩じて來ると
お小言になる。昔支那の聖人の時代には法三章と
云つて法律が三つしか無かつた、其他は何も言は
ないでも穩やかに治つて居たと云ふことである。
家庭に於きましても若し教へざる教育が日頃行届
いて居りますならば何も改めて訓誠小言を澤山使
ふ必要はなくなるのであります。一體叱ることの
澤山にあると云ふのは自分の日頃の教育が如何に
も不充分であると云ふことを現すのであります。
段々いろいろな事を申上げましたが、要するに
教へない教育は子供に適當な周圍を與へると云ふ
問題に歸するのであります。そして是れが、子供
の品性を固める基礎になるのであります。

○元良文學博士の長逝

本會客員文學博士元良勇次郎氏は丹毒症にて久しう病臥中の處、去月十二日長逝せられたり。本會は深厚なる吊意を表す。

○第一回幼兒教育研究會

昨年未開かれた第一回幼兒教育研究會は、豫期にもまして甚だ多數の來聽諸君を得たことは、此の會を開いた本會の主旨に對して、誠に幸とする處であります。因に同會來聽者中の有志諸君より此の會に對して寄せられた寄附金は、それを以て聊か講師に謝意を表しました。茲に一寸附記いたしておきます。

○十二月例會

本會十二月例會は法學博士小河滋次郎氏の「幼兒のための社會的教濟」と題する最有益なるお話がありました。自分の日々の職分内に専心することは最も肝要のことりますが、尙社會の一員として一般の兒童問題に對し、少くも興味を有し研究することは、兒童の友たるお互に必要なことでもあり、又自然のことあります、博士の此のお話は追つて本誌上に御紹介致します。

本誌定價
一冊郵稅共金拾壹錢
拾二冊同金壹圓貳拾錢
郵券代用一割增

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に御送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます。

(庶務上保母紹介に關する件をも含む)の御手紙は
東京市小石川區久堅町七十四番地フレーベル會事務所宛

會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、
雨森鉄宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下千駄谷八七八八倉橋惣三宛

大正二年一月二日印刷
大正二年一月五日發行

東京府豊多摩郡千駄谷町大字千駄谷八七八八
編輯兼發行者 倉 橋 惣 三
東京市本所區番場町四番地

印 刷 者 平 井 登
東京市本所區番場町四番地

印 刷 所 凸版印刷株式會社本所分工場
東京市小石川區久堅町七十四番地
發 行 所 フ レ ー ベ ル 會

ラブ化粧品

謹而

ラブ化粧品愛用者各位へ

御健康を祈り奉る

大正一年一月元旦

京東大阪
中太山陽堂



○先生隨分おもちやが來ましたね○どこ

*君一人で競馬やらうおいこりや面白いな

から ○これはね東京のフレーベル館から
園長さんが買つて下さつたの ○フレーベ

ル館のおもちやはいーのね ○先

生々々僕シーソーにのせて

頂戴 ○先生私に此のマ

、ゴト貸して頂戴

○先生之は何

です

之はね積木で

もつて電車で

も漁車でも出

来て車がある

からほらころ

がりませう ○面白いな

僕に貸して ○あたいにも

ね先生先生／＼＼＼＼

○僕にシングルベルス ○あたいに球投

○先生此の馬は

之は手綱を引くと前に進みますよ*

幼稚園恩物類

九段 東京 製造販賣 フレーベル館

振替東京一九六四〇九 電話番町二九〇九

○子供は可愛い
ものね
すから

○子供は可愛い
ものね

